



JICA専門家時代の辻本壽之理事
(モロッコ国2000～2003年)

イファット だより

～農民参加なくして農業なし～

特集：JICA筑波の農業機械研修とともに

—当NPO法人辻本理事を偲んで—

昨年12月27日急逝された当NPO法人の辻本理事を偲び、同理事が長年にわたり取り組んできた開発途上国の農業機械化、そして適正農業機械の開発と普及を辻本理事の活躍されたJICA筑波の研修事業を中心として概観します。

JICA筑波の農業機械分野研修の現在・将来

—「売れる」適正技術を目指して—

JICA筑波国際センター 主任調査役 日原 一智

NPO便り第14号に寄せて：

本「イファットだより」は、第1号から第13号全て辻本壽之理事の手で作成されてきました。辻本理事が亡くなりましたが、辻本さんの意志を汲み、今後とも継続してニュースレターとしてNPO活動の様子をお伝えします。

* 最近の活動として、ベトナムの「JICA技術協力「持続可能な農村開発のためのタイバック大学機能強化プロジェクト」のチーフアドバイザーの理事西村美彦氏の尽力により12月5日-9日にベトナムで国際セミナーが開催されました。また、12月16日には、若手コンサルタントを対象とした育成実践研修を開催しました。これらの活動は次号にて報告させていただきます。

編集文責：永井 和夫

目次

・特集：当NPO法人辻本理事を偲んで ……P1-3

- ・JICA筑波の農業機械分野研修の現在・将来 日原 一智
- ・平成25年度集団研修「ニッポンのモノづくり」コースを終えて

綿引 忠

- ・1961年から続くJICA筑波の直営型農業機械分野の研修コース

イファット事務局

・偲んで ……P4

- ・辻本壽之氏を偲んで 伊藤 信孝
- ・上司との思いで 櫻井 文海
- ・イファット創設者辻本壽之理事の軌跡 永井 和夫

JICAの農業開発協力は主として小規模農家をターゲットにしており農業機械分野も同様である。過酷な労働が求められる農作業は、途上国の多くの地域において大部分を女性が担っている。このような状況下で適期の播種や収穫が出来ず、低収量による食料安全保障や農産物の低品質による市場での低価格＝低収入が途上国の小規模農家にとって大きな課題となっている。これらの課題克服の要素の一つとして、農業機械／農機具の導入及びそれに伴う人材育成が挙げられることは言を俟たない。

JICA筑波の現在の農業機械分野の研修では、現地農家のニーズや農家をとりまく技術的・社会的・経済的事情に合った試作機を選定、製作している。完成度の高い試作機により農家への迅速な導入を図るのは勿論だが、他にも導入促進に係る工夫をしている。

第一に、①試作機の現地適合化、②デモで農家に操作させ労働生産性向上や収穫物の品質向上等を実感させる、③デモの評価に基づく更なる改良等、①～③のための資金調達を目的とした技術提案書を作成させている。母国での試作機を導入・普及活動を帰国研修員個人個人の努力に任せると彼らの負担が非常に大きく実行されない可能性がある。このため、昨年「試作機の導入による利点」を書いた提案書作成を本邦研修に繰り込み、帰国後の円滑な導入・普及活動の一助としている。同提案書の直接のターゲットは最終利用者である農家ではなく、資金を提供してくれる可能性のある援助機関、国際NGO等の潜在的スポンサーである。これらのスポンサーは「エコノミスト」と呼ばれる職種の人達であり農業機械の専門家ではない。このため提案書は試作機導入による農家への裨益を貨幣価値に換算し、彼らにも投資の意義が分かるようにしている。

第二に、農家だけではなく、野鍛冶を含む地元製造業者も研修の最終受益者に含めるよう研修員に伝えている。これは試作機を再現できる人材育成とも絡め、地場産業との連携が農業機械／農機具の製作・普及に不可欠であることによる。

近い将来に向けて対応しなければならない課題もある。

1. 原価管理：試作機は研修員の試行錯誤により製作され、資材費のコスト積み上げだけでは原価は分かりにくい。将来製品化される時に新興国等からの輸入品に対する価格競争力についても今後研修の中で検討しなければならないと考える。

(次ページに続く)

2. デモンストレーション実施をマーケティングコストの観点から計画させる指導の強化が必要である。
3. 普及体制：作ることと売るとは全く別の分野である。日本の農家調査や東南アジアで定着しつつある日本メーカーの農機の事例から、製品が売れるためには迅速なスペアパーツの提供、修理、技術的助言等継続的なサポート体制が不可欠であることが分かる。このサポートを研修員母国で「誰」が行うのか、果たしてこの難題についてJICA筑波での研修に取り込めるかも検討していきたい。



平成25年度集団研修「ニッポンのモノづくりのノウハウを活用した官民連携による小農家向け農機具の試作品の開発普及」コースを終えて

研修業務総括

NPO法人イフパット主任研究員 綿引 忠

長く農業機械化研修に尽力され、本コース研修の講師でもあるNPO法人国際農民参加型技術ネットワークの創設者、理事でもある辻本壽之博士が、昨年12月27日に亡くなりました。途上国の農業機械化へ知見が深く、研修では講義以外に研修員の試作機に関して貴重なアドバイスをしていただいた。ここに謹んで哀悼の意を表します。

「ニッポンのモノづくりのノウハウを活用した・・・」研修は3月上旬からの本邦研修と10月中旬から11月上旬までのタイ補完研修で構成されている。本邦研修には「日本のモノづくり」の特徴である5S（整理、整頓、清潔、清掃、躰）、カイゼン、品質管理及び改良等々を研修に導入している。官民連携のコースであり、特に民間企業との連携は重要である。今年度は2つの協力企業を新たに得て、研修を実施した。

本邦研修では試作機製作においても企画書、設計・製図、試作機製作・性能試験及び改良までを一体化して研修する。研修員にとっては研修開始から試作機の製作へ向けた研修が続く事になる。



1961年から続くJICA筑波国際センターの直営型農業機械分野の研修コース

JICA筑波国際センターには基幹コースと呼ばれる農業関連の研修コースがあります。稲作、野菜、農業機械そして灌漑排水の分野においてセンター所有の研修施設と圃場を用い、講義・実習実験・視察研修を中心に専門分野における高い実践力と応用能力を身に付けた開発途上国の人材育成のため、8～10ヶ月というJICA研修では比較的長期間の研修コースです。

これら基幹コースは、以前、直営研修コースと呼ばれていました。JICA職員自ら研修指導に当たっていたからです。辻本壽之さんはフィリピンにおける青年海外協力隊の任期終了後、1970年にJICA職員となり農機具利用コースの研修指導に携わり、以来一貫して農業機械関連研修コースの研修指導に当たってきました。

これら直営研修コースは1958年、茨城県内原にあった日本国民高等学校におけるイランからの農村青年受入れに端を発します、日本の戦後復興の中、開発途上国への技術協力の先駆けです。そして、現在のJICA筑波国際センターにおける農業分野の基幹集団研修コースは、1961年にアジア協会の茨城国際農業研修会館において始まります。この日本の稲作技術を開発途上国の技術者に移転する目的で開始された研修は、稲作、農業機械、灌漑排水そして野菜の4コースに分化拡充されます。以降、現在までこれら研修コースは継続し開発途上国の農業農村開発の現場における重要な人材を輩出して来ました。

以下に農業4分野の集団研修の移り変わりを記載します。また別図に農業機械分野の研修コースの変遷を載せました。



今年度は8名の研修員（ミャンマー、ブルキナファソ、タンザニア、ウガンダ、ザンビア、マリ）が試作機を製作した。研修員の製作技術が不十分であれば、研修補助員が手助けしてきたが、今年度は大部分を研修員自身に製作させることにした。細かな失敗も数多くあったが、最終的には研修員の製作技術や知識が向上、全員が無事に試作機を完成させる事ができた。

タイ補完研修では、途上国で稲作の農業機械化に成功したタイの農業機械化政策や農業機械の開発・普及について研修し、本邦研修で発表したテクニカルプロポーザルの改良版を発表した。

- ・1958年（日本の稲作技術をアジアを中心とした開発途上国に）：イランからの農村青年9名に対して日本国民高等学校（現日本農業実践学園）で6か月間の実習を中心とした稲作研修が実施される。
- ・1961年（アジア協会茨城国際農業研修会館における農業実習コース）：この年からアジア協会に研修が引き継がれる。1962年海外技術協力事業団設立（アジア協会解散）
- ・1964年（農業実習コースを稲作普及コースに改称、稲作農機具利用コースが新設）
- ・1969年（1968年に稲作土地改良コースが発足、引き続き野菜コース発足）：稲作、農業機械、灌漑排水、野菜の4コース体制と成り、以降、実習・実験に重きを置いた4分野の農業研修コースが定着し現在に至る。
- ・1983年（稲作機械化コースに加え農業機械設計コース発足）：1988年には稲作、灌漑排水、野菜分野においても各2コースの運営を行うようになり、米生産フランス語コース、農業一般コースなどを含め10コースの直営コースが実施されるようになる。また、職員に加え、研修指導者（シニア人材）及び研修指導員の参加を得て研修運営に当たる。
- ・1996年（5月に筑波インターナショナルセンターと筑波国際農業研修センターが統合）：同時に研修指導は職員主体から研修指導者及び研修指導員中心に徐々に移行。前年の1995年に農業分野の個別研修員受入事業を開始するとともに、外部委託の集団研修コースの運営も開始される。
- ・2002年（1983年から続いた1分野2コース体制が1コース体制に変更）：持続型農業機械化システムコースの開始。以降、時代の要請に適宜対応して直営研修コースが運営されることとなる。
- ・2003年（本年から直営研修コースの運営が順次外部委託される）：以降直営コースでは無く、基幹コースの位置付けとなる。

農業機械関連の研修は日本の集約的稲作技術を中心とした機械化技術の移転を命題としつつ、内容は適宜改善されてきました。以下に過去主要2研修コースの目的を記載します。

主要農業機械関連研修コースの目的

1) 農業機械化コース（1974年～2001年）：日本の集約的稲作を中心とした機械化技術を、開発途上国の条件を考慮に入れながら、講義、実験、実習並びに視察により研修を実施し、研修員自国の農業機械化分野における問題解決能力及び機械化体系策定に関する知識、技術を向上させる。

- ① 水稻生産機械化体系及び畑作機械化体系に関する技術
- ② 水稻、畑作の中小農業機械の構造、性能、評価、導入技術
- ③ 灌漑排水、水田基盤整備、農業機械利用組織並びに機械化システム分析に関する知識、技術

2) 農業機械設計コース（1983年～2001年）：農業機械設計開発等に携わる中堅技術者並びに関連試験研究機関、大学の研究者を対象とし途上国の農機具工業発展のための技術者の養成を目的として、関連分野における研修員の技術水準を向上させる。

- ① 農機具の企画設計、試作と性能試験方法についての技術
- ② 日本の各種農業機械の構造概要把握
- ③ 設計、試作、性能テストに関連する教科についての知識

年	研修コース名	研修実施機関名称
1958年～	イランからの農村青年研修	日本国民高等学校
1960年	ビルマ賠償委託生研修	
1961～1963年	農業実習	茨城国際農業研修会館 (1962年:アジア協会→海外技術協力事業団)
1964～1968年	稲作農機具利用	
1969～1973年	農機具利用	内原国際農業研修センター (名称変更、1974年からJICA)
1974～1982年	稲作機械化	
1983～1986年	稲作機械化 農業機械設計	筑波国際農業研修センター (1981年4月、内原から筑波へ移転)
1987～2001年	稲作機械化II 農業機械設計	
2001～2005年	持続型農業機械化システム	筑波国際センター(1996年5月、筑波インターナショナルと筑波国際農業研修センターが統合)
2006～2012年	小規模農家用適正農機具開発普及	
2013年～	ニッポンのモノづくりのノウハウを活用し農業機械の試作品製作を通じた官民連携	

参考資料

1. 筑波国際農業研修センター設立30周年記念誌「技術研修員とのあゆみ」、1991.12、国際協力事業団 筑波国際農業研修センター
2. 平成7年度筑波国際センター業務報告書(VOLUME II)、1996.9、国際協力事業団 筑波国際センター
(イフパット事務局)

辻本壽之氏を偲んで

NPO法人イフパット 会長 伊藤信孝

2014年の暮れも押し迫った12月27日、思いもかけぬ悲報に絶句しました。人生無常、人の命のはかなさ、生者必滅は世のならいとは申しながらも、お世話になった辻本壽之氏のあまりの急逝に心より哀悼の意を表し、生前のご厚情と多大なる貢献に御冥福をお祈りいたします。稲作機械化、機械設計両コースのJICA集団研修をはじめ、研修員の農家実習受け入れ、研修プログラムの改善など、関わりを上げればきりがありません。定年退職後はNPO設立に尽力されたおかげで今のIFPATがあります。改めて辻本氏の寛大な心から溢れ出る熱い想いと行動力に裏打ちされた貢献に深謝し、これからという時の無念さを心に受け止め、その志に応えたいとの覚悟を新たにしました。心に残る記憶の一つはモロッコで受けたおもてなしです。3週間の滞在期間の毎日、夕食に自宅アパートに送迎・招待を頂き、奥様の手作り料理を頂きました。ハートがあってもマインドがないと出来ない尊い行為です。学位取得に向けたひたむきで、しぶとく継続的、かつ短期決戦力を要する集中努力が実を結び、晴れて学位取得を勝ち取り、努力の積み重ねが大きな達成感と自信をもたらすことを身をもって示されたことは他者に大きな励みを与えたものと確信します。辻本壽之氏の逝去は、わがNPOのみならず、これまで深い関係を構築・維持してきた関係国にとっても大きな損失であることは言うに及びません。あらためて感謝の意を表し、安らかなご冥福をお祈り致します。

上司との思いで

NPO法人イフパット 理事 櫻井 文海

辻本壽之博士と出会ったのは、1983年、ベトナム国籍の私が



JICA筑波国際農業センターに研修指導員として採用された時です。それから、辻本さんとともに、30年以上にわたり農業機械の専門家として、国際協力の仕事を一緒にして参りました。私の初出張業務体験は1984年の春、辻本さんと農業機械設計コースの研修旅行に関する広島方面での農機具メーカーの視察・見学でした。写真は当時、30代の私と40代の辻本さんが広島平和公園を訪れた際の

ものです。辻本さんには途上国の技術研修の管理や適正な

技術移転方法等を教えていただき、よく面倒を見ていただきました。本当に優しく、素晴らしい上司でした。

辻本さんはJICAを退職後、農業機械分野、特にアフリカ・サブサハラ地域に適した小規模農業機械の改良開発のテーマに関する研究課題の博士論文を2006年12月に完成させました。一年間に技術論文を英文2報と和文2報の計4報も投稿することもありました。その姿を見ると大変な能力を持ち、頑張り屋で、我々の見本となる生き方であったと思います。また、辻本さんは開発途上国の農民生活の向上に貢献することを目指すNPO法人イフパットを創設しました。我々NPO法人の活動が順調になるところで、辻本さんがいなくなってしまったことは、大変無念であります。辻本さん、ゆっくり安らかにお休みください。ご冥福をお祈り致します。

NPO法人イフパット創設者辻本壽之理事の軌跡

理事・事務局長 永井 和夫

辻本さんは昭和40年東京農業大学拓殖学科卒業後、農林水産省農業技術研修館助技官を経て、昭和43年、青年海外協力隊(昭和42年2次隊)隊員としてフィリピンで2か年間活動しました。帰国後、昭和45年、海外技術協力事業国(OTCA、現(独)国際協力機構)入団、内原国際農業研修センターに勤務し、以来、45年にわたり開発途上国からの研修員に対する農業機械分野の研修指導に当たっておられます。

その間、技術協力専門家として、計12年以上マレーシア、タンザニア、中国、ガーナ、そしてモロッコの開発現場で活躍しました。平成19年1月、64歳の時に技術協力専門家の経験を土台とした、「アフリカ・サブサハラ地域に適した小規模農業機械の改良開発」の研究により筑波大学より博士号を授与されています。

一方、平成17年、辻本さんは長年の国際協力事業への活動を通じて得た信念「農民参加なくして農業なし」を開発途上国の農業農村開発活動において実現をするためNPO法人国際農民参加型技術ネットワーク(イフパット)を立ち上げました。以来、国際シンポジウムをタイ、ベトナム、ブータン、ミャンマーにおいて年1回開催してきました。また、往年の経験を生かし、JICA筑波国際センターの実施する農業機械の研修コースの研修指導に従事されています。

現在、イフパットには35名の会員と9名の職員がおります。平成27年度から新たに草の根技術協力事業を開始すべく準備中です。ようやくイフパットが開発途上国への支援事業、「農民参加なくして農業なし」の活動を展開するところです。辻本さんの早い逝去が悔やまれます。

「イフパットだより」に関する照会・連絡先

NPO法人国際農民参加型技術ネットワーク(イフパット)
〒300-1241 茨城県つくば市牧園5-13-203
TEL: 029-875-4771 E-mail: info@npoifpat.com
ホームページ: <http://npoifpat.com/>